三角屋根 CB 造住宅のストック価値再考と持続可能な居住システムに関する研究

●研究担当：北方建築総合研究所　環境科学部環境グループ
●共同研究機関：室蘭工業大学、北海道工業大学、北海道文教大学、札幌市立大学デザイン学部、（職業能力開発大学校、照井康穂建築設計事務所、Nd studio）

研究の背景・目的

コンクリートブロック造の三角屋根住宅（以下、三角屋根 CB 造住宅）は、昭和 28 年以降、北海道住宅供給公社によって、道内主要都市へ１万２千戸の供給が行われました。昭和 60 年代には殆ど建設されなくなりましたが、北海道の代表的な住宅形式のひとつとして、広く道民に知られています。しかし、多くの住宅が築後 40～50 年を経過しているとともに、住まい手の高齢化が進んでおり、今後のストック活用の方向性が課題となっています。本研究では、三角屋根 CB 造住宅の魅力を活かした持続的な活用の可能性について検討を行うことを目的としています。

研究の概要・成果

本研究では、三角屋根 CB 造住宅の開発から供給に至った経緯、供給された住宅の現存状況や改修の実態を調査してストックとしての価値を再考し、活用の可能性を提示することとしています（図１）。

三角屋根 CB 造住宅の開発と供給の経緯を明らかにするため、過去の資料を分析するとともに、ヒアリング調査を実施しました。三角屋根 CB 造住宅は、居間中心型の空間構成や屋根形状が特徴的で、間取りは 40 タイプ以上ありますが、大量に供給されたものは４タイプほどに集約できます。供給された三角屋根 CB 造住宅の現状について調査したところ、建設年次が新しいほど、当時の姿を残す住戸が多い一方、昭和 30 年代の住戸は、６割以上が都市化に伴う建替などによって滅失しています（図２）。住まい手の改修履歴を調査したところ、昭和 40 年代の後半には、小屋裏納戸に利用していた２階部分を子供部屋などの居室にする造作工事が行われていましたが（図３上）、その後は、狭小な浴室や台所等を改修するなど、居住性の改善が多く行われています（図３下）。寒さ対策の措置としては、サッシ交換を行っている例があるものの、躯体の断熱改修までは行っていない住戸が多い現状です。

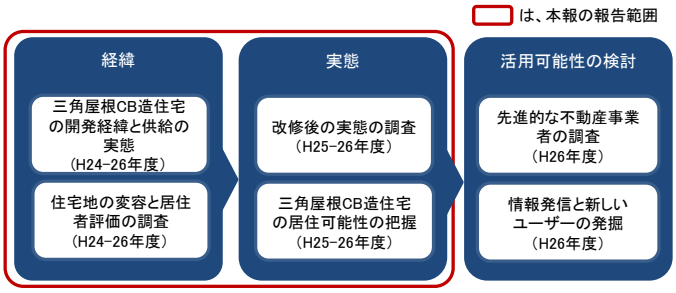

図１　研究のフロー

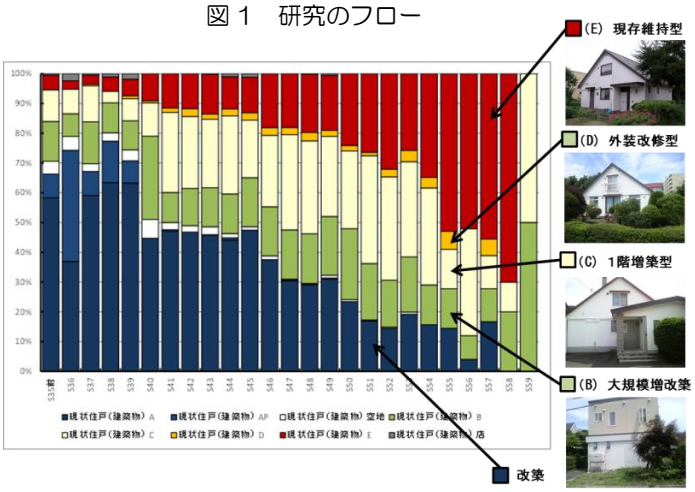

図２　三角屋根住宅の供給時期別現存状況

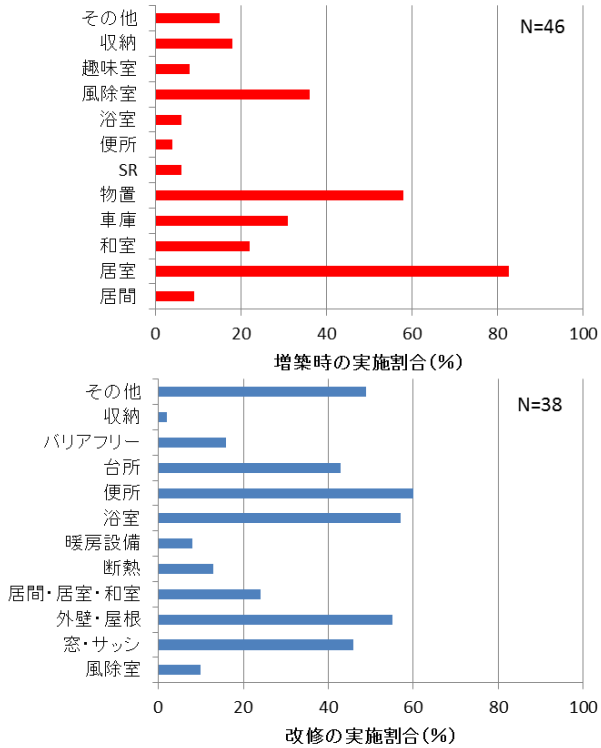

図３　各住戸における部位別の増築・改修の現状

（昭和 41～45 年に造成された住宅団地）

今 後 の 展 開

住宅改修を行う上での課題について検討を加え、現代の住まい手にとって魅力的な活用の方法を提案しながら、三角屋三角屋根 CB 造住宅を将来に残していく手立てを探っていきます。

copyright by Hokkaido Research Organization Northern Regional Building Research Institute